

---

# 魔恋

じ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔恋

### 【ZPDF】

Z8218F

### 【作者名】

j

### 【あらすじ】

魔法のような恋（魔恋）にかかってしまった少女リストのえがく、魔法のようなストーリーです。そして、どこか悲しく、切ないストーリーにもなっています。

## 恋にかかった瞬間。

こんなに君が愛しく見えたのは初めて。

空気が風が太陽がすべてが新しく見える。

そんな感情は初めてだった。

君に会えたからこんな感情ができた。

嬉しかったよ。

何よりも。

すく嬉しかった。

私が死んだら俺も死ぬとか言ってたね。

そんなささいな言葉が嬉しかった。

笑ってバカやつて、ケガして、私を困らせて。私も君が死んだら死ぬって言つたら、君がめちゃくちゃ怒つて、本当、君はバカだよ。バカすぎて泣けちゃうよ。

君は出会ったとき、私を見て、指をして笑つてたね。

私は廊下を歩いていた。

「皆知らない人ばかり。おまけに、寝ぐせついてるし、ついてないなあ。」

その時の私は、髪の毛は所々にメッシュのよつた青い髪がまじつていた。だから皆近寄つて来なかつた。

すると前に髪の毛をオレンジに染めた男の子と真つ黒できれいな髪の毛の男の子二人が私を見ていた。

そしてオレンジ色の髪の方が私を指さして黒髪と一緒に笑つていた。

私は男の子達の方に行つた。

「何? 私おかしい?」

「へへへ、面白くてや。」

「寝ぐせついてて、笑つちゃつた。ごめんね。」

オレンジ髪の方はへラへラしてて、少しいらだつが、黒髪の方は真面目そうで、けつこうタイプだ。

「ねー、名前教えて?」

私は黒髪に話かけた・・・はずなのにオレンジ髪が

「俺の事はイクトつて呼んで!・!」

「あ、そう。で、君は?」

「俺はせいじでいいよ。」

「せいじ、私はリストって呼んで。」

「リストー？ 可愛い名前。」

「あのさイクト、私せいじに話しかけてるんだけど・・・。」

「そんなん気にすんなよー。」

「だってリスト、俺に話しかけてくれないんだもん。」

「はいはい、じゃま。リストちゃん、そろそろ教室戻るね、放課後、  
またむかえにいくね。じゃあね。」

「リストー！バイバイー！」

「うん。じゃあね。」

そう言つと私達はそれぞれの教室に戻つた。

教室で私の頭に残つていたのはせいじだった。

私はあの時、あのほんの少しの時間で、せいじに恋してしまつたんだ。

## 思い込みの運命。

私は魔法にかかったようになり、頭にせいじが残っていた。

今私の中で、恋とは魔法なのだ。【魔法の恋】略して魔恋。

私は魔恋にかかつてしまつた。

心の中でもやこやこ書つたらすぐ放課後になつた。

「ワース！」

「えつ、イクトだけ？..」

「モーだけどー。」

「セニじは？」

「セニじは今日、急ぎの用ができたからつて帰つた。」

「モーなんだ・・・、じゃあ帰る。」

私が帰るひとした瞬間。

「ダメだよ。」

イクトがについつ笑つて私の手をつかんだ。

「今からリストは俺だけのリストだから。」

「はつ？何言つてんの？」

「リスト、どつか行きたいといふとかないの？」

「別にない。」

私は少し、キレぎみに言つた。

すると突然、

「イクトーーーリストちゃーん！」

せいじが走つてきた。

「あれつ、せいじ、もう用事終わつたのかよー。せつかくこれからリストと二人きりのチャンスだつたのにー。」

「なにこいつてんのよー！」

「あはは、じゃあどー行く？」

「やつぱ、喫茶店だるーー  
だよなつ？リストーー！」

「喫茶店・・・いいよ。ちよつと今あつかつたんだよね。じゃあ行  
こつ、せいじ。」

「俺を忘れるなよー！」

そして三人で喫茶店に入った。

「じゃあ、あらためて、せいじ、メアド交換しよう。あと電話番号も。」

「俺ならいーよー！リース！」

「だから私はイクトじやなくて、せいじに聞いてるのー。」

「まあまあ、三人皆でこつかんしよう。ねつ、イクト、ねつ、リスちゃん。」

「俺は賛成だな。リスは？」

「しようがない、賛成するわ。」

そして、三人でメアド交換をした。

『ピッ』

「あれっ？リス、メアドに魔法つて言葉入つてるわね。」

「イクトも、魔法つて言葉入つてるわね。」



「私にあんたとの魔法が、かかったとは思えないわ！」

## 月の夜・危険な時間。

イクトせじめりへポカンと口を開けて見ていた・・・が、

「はまつー里斯、お面白こと事言つんだな。」

「私は本氣よ！私は、運命つて言葉より魔法つて言葉が好きなのー。だから、恋も運命も私の中で魔法なのー。」

その時、せいじが言った。

「いーんじょないかな？俺、そういう考え方、すいへこと細づ。

「だよね！

「まーら、せこじま、ちやんとわかつててる。」

「あーあ、そーやつてせいじほ里斯をかばうんだー。好きなのー。」

リスは心臓の鼓動がはやくなり、驚いた。

「なつ、何言つてどのよーねつ、せいじ・・・。」

「えつ、好きに決まつてるじゃん！  
リスちゃんは友達なんだからさー！」

リスはポカンとなつた。

「えつ・・・・・。」

「なあ、せいじ・・・、お前・・・天然？」

「イクト知らなかつたつけ？  
俺、超天然だよ？」

「はあ。もういい。もう暗いし私帰るね。  
じゃあね」

そういつてリスはお金を置いて一人で暗い道を帰つていつた。

「リスちゃん、帰つちゃつたな。イクト。」

「うん・・・・・。」

その頃リスは、せまくて暗い道を一人で歩いていた。

「なによーイクトもイクトでせいじもせこじょー。」

すると、誰もいなかつたはずの暗い道に前と後ろから男が全員で五人来ていた。

リスは少し怖くなり、はや歩きで歩いたが、一人の男に腕をつかまれてしまった。

「はなして下さいー。」

「可愛いね。」

でもさあ、そんなに可愛いと犯されちゃうよー。」

男たちは笑いながらリスを見ている。

「やめてよーはなしてー。」

リスは必死に抵抗した。

すると、そのグループのリーダーのような一人男がつぶやいた。

「もしかして、今ここで俺らに犯してもらいたいんじゃね?」

リスは恐怖で手足をがくがくふるわせた。

「こつ、こや、やめて、来ないで……。」

かると、

「あーあ、リス、綺麗な手、そこつがさわったせいで汚れちゃった  
ね。」

「え・・・？」

そこには、イクトがいた。

「だ、誰だテメー！」

「うるさいなあ、あんたら黙つててよ。

そんな汚い声聞いたら、俺まであんたらみたいに汚くなつちまつ。

「イクト・・・、なんで？なんで！」

「するとイクトはこつものよつて元気一ヶ口笑つて答えた。

「だつて俺ら運命・・・いや、魔法にお互いかかつたから。でしょ?  
?リス。」

リスは落ち着いたように笑つて答えた。

「・・・バカ。」

「くそつ・・・

あつ・・・そうだ。おい、お前!イクトとか言つ奴!

俺らの仲間になんないか?それで一緒にその女を犯しちまおつ!」

「は?俺が?何言つてんの?あんた。」

「お前もその女を犯しちまいたいんだろ?」

「俺は、そんな汚ねえ事しねえ。

俺は、リスの魔法にもつとかかりてえんだ。リスが笑つて、俺が笑つて、せいじが笑つて・・・ただそれだけでいい。」

リスは驚いたが、少し心臓の鼓動がはやくなっていることきつい  
た。

「イクト・・・。」

「つて事だ！はやく、俺らの前から消えな、あんたら。  
今度またリスを犯そうとしたら・・・あんたら殺すから。」

「ちえつ！

行くぞ！」

男達は帰つて行つた。

その後、何も言わずに、一人で帰つた。

その日は月が綺麗で、まるで、魔法で明るくぐらされているようだ  
った。

そしてイクトはリスの家までついて来た。イクトはバイバイと言つ  
て、後ろを向いて帰つとした瞬間リスはとめた。

「待って、イクト・・・なんであそこ聞いたのわかったの？」

「さあ？なんでかな？リスが泣いてたからかな。」

「イクト・・・。

「ありがとう。」

そのままイクトは何も言わずに後ろをむいて、手をかるくひらひらさせて走つて行つた。

リスはその姿をただ見つめていた。  
ずっと、ずっと・・・。

その姿が見えなくなると、リスはゆっくり家に入った。

夜遅くに、リスは自分のベッドに横たわり、ケータイに、日記を書いていた。

『私はイクトに、』

で、手が止まっていた。

「はあ・・・。

魔法・・・、そんなの私、イクトにかけてないよ。』

するといきなり、メールの着信音が鳴った。  
それは、せいじからだった。

『リスちゃん、今日大丈夫だった！？

せいじから聞いたよ！おそれなかつた？』

そう書いてあつた。

『大丈夫。イクトが守ってくれたよ。』

しばらくして、またメールが来た。

『そつか。

きつと、イクトはリスちゃんの魔法にかかつたんだよ。』

なぜか、その後リスはせいじに返信せずに、ケータイを閉じた。

～勇気の魔法～（勇魔）。

次の日学校に来たりスは驚いた。

そこには、昨日の夜にリストを犯そうとした男5人が転校していった。

「え・・・・・。

いや・・・嘘でしょ？」

すると男は先生にすました顔で得意そうに喋りかけた。

「先生！俺ら、リストと知り合いだから、席近くにしてくれない！？」

「な、何言つてるの！？」  
先生、私そんな人達知りません。」

その後、先生は話をかたづけてリストの席の近くに5人を座らせた。

「よろしくね・・・リストチャン。」

ずっとリストは怖くてうごけなかつた。

そのまましばらくして、休み時間になった。

チャイムが鳴ると同時にせいじとイクトがリストのクラスに入つてきた。

「おい！あんたらなんのつもりだよ！？」

昨日、またリストを犯そうとしたら俺があんたらを殺すつて言ったよな！？」

5人の中の1が言つた。

「さあ？なんのことか俺らさつぱり分かんねえなあ？」

「テメエらー！」

イクトが殴りかかるうとした瞬間、リストがそれを止めた。

「イクト……やめて。大丈夫、大丈夫だから、手をだしちゃ駄目だよ……。」

「何言つてんだよリスト！」

「こつらは、あつとまたリスを！…！」

「いいからー手を出さないで！…！」

「ははは…！」

女が言つた事だけでやめるなんて、かつこわる。」

「違う！リスは特別なんだ！」

「特別う？お前バカなんだな。

人間に特別も何もねえよ！人間は変わらねえ、ただの『人』なんだよー。」

言いかえそととしたイクトの前に突然、せいじが出てきた。

「リスちゃんは違うよ。普通の人間とわ・・・お前らともぜんぜん違うー！」

「かつこばっかりつけて、調子に乗んなよテメエー…！」

俺らがもし、リスチャンを犯してあげたとしたら、同じような態度はとれるかな？」

その時、リスは怯えながら、驚いた。

「い、いや……。」

「テメエらしい加減にしろよ！」

イクトがまた殴りかかるうとした瞬間、男の一人が笑いながらイクトにむかってこう言つた。

「女との約束も守れないのかよ。  
手・を・出・す・な、だつたよなあ？」

「おい、リス！なんで手を出しちゃ駄目なんだよ！？」

「そんなことしたら、イクト、学校やめなきやいけなくなるし……  
こんな人達のためにイクトが手を出す意味ないよ！」

「リス……。」

「私、そんなの嫌だよ……。」

それに、まだイクトとせいじに私の魔法にかかるつてほしいからさ……

泣き声になりながら、リスは笑った。

「仲良じいひこかよ？…むじずがはしなな…俺らがリスチャンをめ  
ちゃくちやんにしてやるよ…！」

「そんなこと、させねえ。  
何があつても手は出さねえ。  
でもなあ、俺らが守んだよ！リスを…」

「何言つてんだよ…？テメヒらなんかに女が守れるかよ…？」

「守れるかどうかじゃない。何があつても守るんだよ…」

イクトの発言に、リスは泣き声になつた。

「守つて…・・・守つて…・・・  
守つてほしこよ…・・・  
イクトとせこじこ守つてほしこ…・」

イクトはゆづくつコスを抱き寄せた。

「俺とせこじがお前を守るから、何があつても守るから！-！だから・・・・・、だから笑つて、まだまだ俺らに魔法かけてくれよ。」

そこで、またリーダーのような男が割つて入ってきた。

「お前、見るとムカつくんだよ！-！」

仲良じいじもここまでくるとキモイな。」

リスは怖がりながらも言い返した。

「なんで貴方達はそこまで私達につきまとつの！-？もうここ加減にしてよ！-！」

「なんでつきまとつか？

そんなの決まってるじゃん。

リスチャンを犯してみたいから。」

「だから、リスは俺らが守るって言つただろー。」

「そんなのお前らにできるわけないだろー！-  
なにが魔法だよ！-なにが笑顔だよ！-

笑わせるんじゃねえ！」

その時、リスは少しキレながら言った。

「笑いたきや、笑えばいいじゃない。」

「なつ、なんだとー？お前、あんま調子乗んなよーー。」

『がきいいい』

ほほにパンチがおもいきり当たった音が響き、床に転がり、机に当たる音も響いた。

## 悲しみ・醜いじぶし。

「 も も も も も も ……」

教室にいた女の子が、田の前で起きた事に驚いて悲鳴をあげてしまった。

そこには、リスが横たわり、ぐったりしていた。

ついに押さえきれなくなり、イクトはリスを殴った男を殴った。

『バコオオオン』

リスはその姿を見て、イクトに怒った。

「 イ、イクト……、なんで殴つてんのよ……。」

「バカ野郎！！

なにが魔法だよ！なにが約束だよ！

その程度の魔法や約束なら俺は簡単にやぶる。

お前は俺の心配するんじゃなくて、自分の顔でも心配してろー。」

「リストちゃん、今度ばかりは俺もイクトに賛成だよ。」

「せこじまで……。」

せいじは優しくリストの頬に触れた。

「リストちゃん……頬、こんなにはれてる。」

「テメホら、女に、しかもリストに手を出すなんて汚すぎじゃねえか  
！？」

「ふつ、じやあお前らは、わしがリストちゃんに言つた、【守る】と  
ゆつ言葉はされたのかよ？」

「……俺は確かにリストを守れなかつた。  
だからこそ次から、もつと、守りたいって思つんだよー。」

その時、先生が教室の中に入ってきた。

「なにやつてんだお前らーー！」

わつき女子生徒の叫び声が聞こえたが・・・。

とにかく、男子生徒一名ー自分の教室戻れー他のやつらは席につけ

ーーー！」

セイジリストは、わかれた。

「お前ら、わつき何があった？」

「・・・・・。」

リストは詰めとしなかった。

「おこーー！」

「先生に、関係なんてないです。」

先生は怒った。

「じゃあかってこしろーー！」

その後、時間はすぐにたつて放課後になつた。

五人の男達は走つてどこかに行つてしまつた。

リスはそのまま下駄箱に行き、靴をはいて学校の裏あたりまで歩いて行くと、

リスはそのまま下駄箱に行き、靴をはいて学校の裏あたりまで歩いて行くと、

『ドスツドスツ、』

「うつ、うう……」

と言ひ声が聞こえてきた。

のぞいて見ると、五人の男達がイクトとせいじをボコボコに殴つていた。

「な、なんで!?」

「はあ、はあ……」

「ふん、いいきみだな。」

イクトは男の一人をにらみつけた。

「なんだよ、その日は、お前らがリストちゃんのかわりに自分たちが  
『きせい』になるって言つただる。」

「嘘・・・そんなの、嘘・・・でしょ？」

リストは、おもわず飛び出してしまつた。

「リスト！？」

「リストちゃん！？」

「なんだよ！？」

「なんで言つてくれないの！？」

「私のかわりに、『きせい』になるなんて・・・。」

「・・・リストの事、守るって言つただる。」

「イクト・・・せいじ。」

「リストちゃんを、守るから・・・。」

「もひ、いいよ。

・・・、あんた達、私を襲いたきや 襲になさこーーー。」

「もう我慢できなこーのーーー。」

「リストー?」

「なに言つてんだよー。」

「もう我慢できなこーのーーー。」

「もう我慢できなこーのーーー。」

「もう我慢できなこーのーーー。」

「マジかよ、ワッキー。」

その時、男の一人がリストの肩に手を置いた。

すると、イクトは怒りぐるつたよつて叫びだした。

「うわあああああーーー。  
やめろおおおおおおおーーー。」

リストに手を出すなあああああああーーー。」

## 『パン、グキイイ』

イクトのおもいきり力を込めて出したがごぶしが、男の頬にヒットし、骨が壊れたようなくらいぶい音がした。

他の男達も続くように走つて行つた。  
男は叫びながら走つて行つた。

やひやせりや いけない事。

「何やつてんのよ……イクト。」

イクトは息を荒くしながら下を向いていた。

「はあ、はあ……。」

「イクトが学校やめたたら、また楽しく学校、行けなくなるんだよー。三人で笑えなくなるんだよー。」

「……俺だつて、殴らなによつにしたさ……でも、そうしなあや、お前はあこつらに犯されたんだよー。」

「かつーばつかつけないでよー。」

「私にだつてやらせや いけない事があるのー。」

「やひやせりや いけない事つてのは犯される事なのかよー？ そんな汚ねえ事なのかよー？」

「やつだよーもつまつとこで。」

リスはどこかに走つて行つた。

「これしか・・・

私はできないよね? イクト・・・せじじ・・・。」

リスが向かつたのは男達のところだつた。

「お願いします。なんでもします。  
だから、もうイクトとせじじ手を出さないで。」

「なんでもするだと?」

「犯したきや犯して。」

「俺らの望んでる事はそんな事じゃねえんだよ。」

「じゃあ何?」

「なんでもしていいから。」

「仲間の顔の骨を壊した罰だ。  
お前も殴らせる。」

「わかった・・・

「よし、ここつをつるか」

リスはがくがく震えていた。  
恐怖でいっぱいだったから。

その頃、イクトとせいじはリスを探していた。

「リス

！」

「リスちゃん  
やん！」

「くつや、ビーハーるんだよー。」

「・・・リスちゃん、あいつらの所？」

「あいつら・・・、  
許さねえ！！」

その頃、どこかの倉庫から、たえまなく、人のうなり声が聞こえていた・・・。

「・・・・うう、ううう・・・うああ！！」

《ドゴウ、ドゴン、》

「俺はなあ、お前以上に苦しい思いをしたんだよお！－！」

《バゴンシ》

「うう、ブハア！」

リスの口から、血が吹き出した。  
頬もはれて、体もあざだらけだ。

その時、イクトとせいじが来た。

「イ・・・イクト、せ・・・いじ。」

「テメヒラ・・・。」

「へつ、俺らはなあ、女だからって容赦しねえんだよー。」

「来ないで・・・

「気がすむまで、殴らせてあげて。」

「リスちゃん！？  
何言つてんの！？」

「いいから・・・  
来ないで。」

「・・・・・わかつた。」

「イクトーー？何言つてんだよーー？」

イクトはゆつくりうしろを向いた。

「リスは、かたをつけるつて言つてるんだ。

リスは、強い奴だから、俺は信じる・・・信じられるんだ。」

「ありがと・・・・・、イ・・・・クト。」

「わかつたよ。

俺も、リスちゃんを信じるよ。」

せじこじもゆつべつじひを向いた。

「二人共、ありがと・・・・。」

「いい度胸じやねえか。  
よし、続けるぞーー！」

それから、一時間くらいリスは殴られ続けて、やつと男達から、解

放された。

「リスト……。」

「二人共……、信じてくれてありがとう。」

「このつ、バカリス！……！」

心配をせやがつて。」

「さうだよリスちゃん！心配したんだからさー。」

「でもこれで、おあこひでしょ？」

「じゃあ、許してやるか。」

「やつ……。」

「じゃあ、明日ケリつけにいくか。」

「うふ。」

「うふ、この出来事を終わつにしなきやね。」

そしてリス達は別れて家に帰つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8218f/>

---

魔恋

2010年10月10日01時45分発行